

## 啄木と洪民

### —村人としての啄木—

#### 1

徳川時代(封建社会)にあつて、人々は、職業選択の自由もなく、藩から自由に出ることもできなかった。生まれた土地で育ち、老い、死ぬ、これが人々の宿命であつた。私たち日本人の話し言葉の基底には、徳川封建社会で育てられた藩の言葉、啄木の場合でいえば「南部弁」がある。

明治になって人々は職業選択の自由、移動の自由を得た。わけても才能のある青年達は大きな夢を抱いて東京に出た。明治五年に出版された福沢諭吉の『学問ノススメ』は、当時の明治の知識青年のバイブルであつた。それから十五年後、日戸村で生まれ、洪民村で育つたのが啄木である。啄木の時代は、すでに学校制度もほとんど整備され、優秀な頭脳をもつ者はその制度の中でさらに上級の学校を目指していけば、それなりの将来のポストも約束されていた。それは多くの場合、故郷を離れて都市に生きることでもあつた。

才能ある多くの若者がこうして村を離れた。また一方、村にとどまる者も家父長的な家の制度の中で生きるほかなかつた。長男(南部弁で「えなさん」と呼ばれた)は家督を相続し、それ以外の二男、三男(同じく、「おんず」、時に「なげおんず」と蔑称をもつて呼ばれた)は「かまどわけ」(分家)をした。娘達は「え」(家)を出て、「よめっこ」(嫁)

となつていった。子供の数も多かつた。鉄鋼業や製糸など近代産業も日に日に躍進していった。村を支える者と、村を離れて生きる者とに別れ、村は食糧生産基地として、町―都会は近代産業を支える場として、それぞれ発展をみた。啄木の短歌は元村人の、東京遊民の心を代弁するものであり、それを生活者らしい平易な言葉をもつて表現したところに「近代歌人」啄木の新しさ、個性があつた。

ふるさとの訛なつかし／停車場の中に／それを聴きにゆく

(初出「東京毎日新聞」明治四十三年三月二十八日)

人口に膾炙したこの歌も、東京に出て生きねばならなかつた多くの人々の心を表現する歌であり、さしあたりは、ふるさとを懐かしむ歌といつてよいであろう。

しかしその「懐かしさ」がどのような現実(心的現実)を土台として生まれたものかは必ずしも理解されているわけではない。読み手は自らの境遇に引きつけ、啄木の歌に自らの慰めを見出してきた。それは研究者でもない啄木愛好家にとって何ら非難に値するものでない。

しかし、啄木を啄木として理解しようとする者にとっては、それだけではすまぬであろう。一体、啄木にとって「ふるさとの訛」―南部弁、ひいては「ふるさと」洪民村はどういう意味をもつ存在であつたか。

黒 澤 勉

(岩手医科大学教養部文学)

啄木の散文をみると、短歌には何われなかつた複雑な屈折した故郷への思いが表現されている。たとえば次の言葉。

「目に入り、耳に入るものは、疲れた色をしてゐる男の顔、おどおどした女の眼、濁音の多い言語、暗色の勝った服装、そして湿りかへった白い埃！ 同じ東京の出入り口―新橋―に比較して、これは又何たる相違、何たる対照でせう。『東京の裏門』と此処で私は上野を呼びます。春も、夏も、午前も、午後も、明るい日光を浴びるといふことのない裏門です。永久に幸運の輦を牽き入れられることのない裏門です。そして私は出るにも入るにも、その裏門よりすることに定められてゐる我々東北人の運命に対して、運命とその性格とに對して、一種の呪詛、と言ふにはあまりに弱い、悲哀、と言うには又余りに皮肉な、謂はば嫌悪に近い或感情を有つことを禁じ得ないのです」

（明治四十三年四月七日起稿『故郷に入る』）

「ふるさとの訛……」の短歌の発表された時と、未刊の小説『故郷に入る』が書かれた時との間には、わずか十日あまりの時しか経っていない。ふるさとの訛なつかし……と詠んだ啄木は、実際に故郷に入る、という設定の小説を書いていたのである。小説は盛岡で書かれ、「明日は愈私の生れ村―S村」に四年ぶりで帰るといふ設定になっているが、洪民村に帰ったところまで書かれてはいない。洪民村に帰郷した自分を書こうとして、想像をふくらませたものの行き詰まったのではなからうか。それが、この小説が未刊で終わった理由であり、その行き詰まり、詰屈の中に啄木の複雑な故郷への思いをみてとることができるのではなからうか。

小説は又、「奥様」（おそらく与謝野晶子を指すと思われる）に呼びかけるようなスタイルで書かれていて、その中で「新橋停車場」から出入りする「明るい」奥様に対して、東北人たる己れの「暗さ」が強調されている。

啄木の東京での生活は、文学者としての経済的に自立した生活を営む

難しさ、家族関係の悪化、病気の苦しみなど、絶望的な状況にあったが、ここに描かれているような「東北人」としての劣等感、疎外感も根強かつた。「私が私の心に東京人の乃至は関西人の明るい、愉快な精神を取り入れようとした努力もすべて失敗でした」（同）とも記すように、啄木はいかに「東京人」、ないし「関西人」になろうとしてもなりきれなかった。東京弁を駆使し、明るく振舞おうと努めても、「東北人」特有の暗さや、その言葉の訛りから脱け出すことはできなかった。負けず嫌いな啄木はそれでも「人に遭へば成るべく太い声を出さうとする、元氣な事を話す、戯ける」といった「悲しい癖」（『追想』明治四十二年五月四日）をもつて生きていた。

しかし、東京での生活が続く中で、啄木は自らがどう努めても骨の髄まで「東北人」であるという事実を苦々しい思いをもつて納得せざるをえなかつた。それは同時に自分が東京で生きる人間ではない、という思いにもつながつた。「ふるさとの訛……」の歌は、たまたま耳にした「ふるさとの訛」をなつかしく思ったのではない。わざわざ「それを聴きに」行くとしたのである。そこに都会人として、文学者として生活することに疲れ果て、身も心も安らげる「ふるさと」を求めた啄木の心がある。

病のごと／思郷のこころ湧く日なり／目にあをぞらの煙かなしも  
かにかくに洪民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川  
田も畑も売って酒のみ／ほろびゆくふるさと人に／心寄する日

歌集『一握の砂』に収められたこれらの歌は、「ふるさと」「洪民村」の山や川、人々に対するなつかしさと深い愛着がこもっている。啄木は歌を作りながら、自らが「村の人間」であることを深く自覚するようになったのである。それは北海道流浪の果て、東京での小説家としての自立の夢が破れた果てに辿りついた悲しい自己認識であった。

しかし現実の啄木は、故郷に帰ろうとしても帰ることのできない事情があつた。自ら故郷と縁を切っていたからである。洪民小学校における反逆、その頂点ともいふべきストライキ事件は啄木一代の、大見得を切つ

た村との絶交状のように私には見える。威勢のいい啖呵を切った男が、どの顔下げておめおめと、帰郷などできよう。しかも啄木は人一倍、自尊心の高い男であった。帰ろうにも帰ることのできない現実の故郷であるがゆえに、それは「魂のふるさと」を希求する深い悲しみとなつて表出された。歌で「ふるさと」を歌い、小説で帰郷することを夢想するしかなかった。それはまさに「ふるさととは遠きにありて思うもの、そして悲しく歌うもの」にならざるをえなかったのである。

## 2

啄木は友人達に「でんぴ」とか「でんぴこ」という渾名をもつて呼ばれたという。<sup>(注)</sup>「おでこ」の南部弁である。「おでこ」の「お」は接頭語で、「でこ」は「でびたい(出額)」を省略して親しみをこめて言ったものである。「でびたい」の最初の二文字をとつて「でび」あるいは「でんぴ」とか「でんぴこ」というふうにならざるを言ひ、「でびたか」というと額の高いこと、又その人をいうし、「でんぴこおんず」というと、おでこの男の子、ということである。

また「ふくべっこ」とか「石川ふくべっこさん」(前者とともにいずれも金田一京助『啄木余興』より)とも呼ばれたという。(実際の発音としては「ふぐべっこ」と濁音化したはずである)「ふくべ」は瓢箪のことである。これは、そのふつくらとした豊かな頬をもつことからつけられた渾名である。これに「いつ見ても寒き顔せり昂然と右の肩をば上げし啄木」と詠まれたポーズを思い浮かべてみれば啄木の性格の一端までしめられる。

こうした啄木は村人にどう見られていたか。「檀家のなかには兄に対してでもよくはいわない者もでてきはじめていた。『お寺のぶらり提灯が帰ってきている』という悪評はしばしば耳にするところであった」(『兄啄木の思い出』三浦光子)という証言にあるように、啄木の、村における評判は悪かった。共同体意識が強く、勤勉で保守的、頑固、「教養のない」

とされる当時の村人にとって啄木は怠惰な青年として厳しい批判の目でみられていた。東北の貧しい農村に生きる村人にとって、「かせぎもしねえで」(働いて収入を得ることもなく)本を読んでいる「せっこぎ」(怠け者)は、のけ者にされかねなかった。しかも啄木の場合、寺の住職という檀家の信頼なくしてはやっていけない知識階級に属する僧侶の一人息子である。『啄木発見』(吉野孤洋)によると、村人は啄木不信の念が強く、多くの人が「石川ずう人はよくない人がんした」「あの寺のデンビ息子のどこがえらいってす」と言っていたという。

盛岡中学のまじめな生徒達からは、啄木は怠惰で尊大な生徒として警戒、敬遠されている一面もあったものの、その才気煥発な、明るい社交的な人柄と、華やかな弁舌、豊かな文才ゆえに、親しまれ、愛されもした。しかし、当時の村人は、啄木を県下の名門盛岡中学に学んだ秀才でありながら、試験で不正行為を働き、中途で退学、あまつさえ節子という恋人をもち交際しているなど、とんでもない「不良」として噂したに違いない。恋愛結婚を当たり前のこととする現代の感覚で考えると啄木への村人の不信は理解できない。南部弁の「すぎづれなきつれ」(恋愛結婚は泣き別れする)という言葉が示すように、見合い結婚、そして生活の安定が第一と考える人が圧倒的に多い村の中にあつて、個人を尊重し、恋愛を尊しとする啄木の思想はとうてい理解されるものではなかった。父一禎が宝徳寺住職の地位を追われたのは、息子、一の村人からの不評もあつたからであろう。(当時の村人にとって「啄木」は存在しなかった)

私は、平成十三年九月から盛岡弁の研究を始め、地元の新聞に週一回連載中であるが、啄木が村人からどう呼ばれただろうかと想像してみる時、二つの言葉が思い浮かぶ。一つは「ごんけはぎ」、一つは「はんかくせ」である。

「ごんけはぎ」とは、簡単にいえば自慢家ということである。語源としては権現(仏や菩薩が衆生を救うために種々の姿をとつて、仮に現れること。またその現れた姿)のような口をきく、つまり、獅子吼する、大

言壮語することからきている。ニイチエや高山樗牛の圧倒的な感化、そして又、日清・日露戦争によってふくれあがった「大日本帝国」の誇大な自意識の感化を受けて育った啄木は、自らを天才だと信じていた。その過信こそ啄木の、あれほどの無謀な行動を支えたものであった。その啄木の話す言葉は与謝野晶子がいのように、まことに花吹雪の散るような、<sup>(注五)</sup>華やかな夢、虚栄に満ちたものであったろう。しかし、目先の生活のために、地べたをほうようにして汗水垂らして働いて生きねばならない村人にとって、啄木は自分達とは全く違った「ごんけはぎ」の典型であったのではなからうか。

また、いま一つ村人が啄木を評する言葉として想像されるのは、「はんかくせ」という言葉である。「はんか」とは「なまはんか」の「はんか」で、詳しくいえば「はんかつう（半可通）」つまり半ばしか通じていない、ということ、それは「野暮」以下とされた。「つう」とか「はんか」「野暮」それに「いき」などという言葉はすべて、江戸時代の遊里文化が育てた言葉である。遊郭の世界に通じたふりをして、粋がっているが、実はまだまだ「通」などと呼べないというのが「野暮」であり「はんか」である。「通」や「いき」を理想とする社会にあって、その偽者、真似事も多く登場したのであろう。それが「野暮」ならぬ「はんかつう」である。

井上ひさしの戯曲『泣き虫生意気 石川啄木』という言葉は、啄木を見事に捉えている。しかしこれは共通語であって、南部弁というならつまり、村人からみれば「なげつつ、ごんけはぎ、いすかわたくぼぐ」とか「なげつつ、はんかもん、いすかわたくぼぐ」となるであろう。（「たぐぼぐ」の「た」にアクセントがある）

「はんかくせ」は「生意気」同様、若い者の未熟さ、気負いという言葉であるが、南部人の感覚ではそこに東京風の流行にかぶれているという含みをもって「あいづあ、はんかくせやづだ」という。しかし「はんかくせ」人間も、まぎれもなく村の人間であり、どんなに東京に憧れよう

と、村人なのである。そして若い時「はんかくせ」と非難された人間も様々な経験、苦労を重ねる中で人間的に、社会的に成長し、村人から尊敬の念をもってみられるようになることも多い。そもそも、青年にして村から一歩出ようとしない、ということは逆に又、成長の可能性を自ら閉ざした生き方ともいえるのではなからうか。

## 3

明治四十一年四月、啄木は北海道での生活を切り上げて小説家として立つべく上京した。その啄木を変わらぬ友情をもって支援したのは金田一京助であった。金田一は久しぶりに啄木に会った時の印象を次のように書いている。

「坐ってお互いに顔を上げしげ見ながら、目を細くして感慨に咽んだり、どれどれまあ久振だから握手でもして健康で逢えたことを喜びましょうよと手をのべて握ったり、何時の間にか、すっかり二人とも忘れかけた国訛りになって、一言ずつに感歎しながら、驚きながら、分れて以来のお互の生活を一通り話し合った。私の涙ぐましい程、嬉しくもなつかしかったのは何を云うにも今度の石川君は、しみじみとして、気取りもなければ、痩せ我慢もなければ、見栄坊もなく、一切の過去を綺麗に清算して少しのわだかまりなく真実真底から出て来る本音のようなことばかりが口を出る、という気分だったことである。云うことが、そうだろう、そうだろうと、みんなそのまま受取れてびしびしと来る事ばかりだったことである」

（『啄木余興』）

北海道での約一年に及ぶ転々とした流浪の生活を経て、上京した後、啄木の心の中には『雲は天才である』に見られるような反逆的ローマン主義、天才意識は陰をひそめた。それに代わってあらたに芽生えてきたのは、自分を客観的にみるまなざしだった。酒に酔っていた者が、醒めて酔っていた時の己れを振り返るように、啄木は冷静に己れを擬視する

ようになった。

折しも文壇は自然主義文学の勃興期であり、啄木は夢みる人、あこがれの人から現実凝視のリアリズム作家をめざして精進する。しかし、その一方、貧窮に喘ぐ生活から、自らの半生をしみじみと回想することも多くなった。啄木は歌を通して、自らの半生を再構築しようとした。自づから湧き出た感慨は溢れるような歌の流出となり、それはやがて自伝的な歌集、回想・懐郷の歌集としての『一握の砂』（明治四十三年十二月一日発行）の創造につながっていく。

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなし

消ゆる時なし

（初出『スバル』明治四十三年十一月一日）

『一握の砂』所収のこの歌をその通り真に受けて、詩人啄木を迫害し、追放した洪民村の村人を憎く思っている人がいる、という笑い話を耳にしたことがある。それをいうなら、洪民村を追放されたゆえにこそ、啄木は望郷の歌人として国民のものになった、というべきであろう。

この一首の背景となっている洪民村における父、一禎及び石川家の立場については、多くの論があるが、ここでは必要最低限のことだけ記しておく。

よく知られているように明治三十七年十二月、父一禎は本山に納めるべき宗費を滞納したため曹洞宗の宗務院から住職罷免の処分を受けた。生活の基盤を失われ、家を失ったことを意味する。この時以降、一家の経営は啄木の双肩にかかることになった。しかも啄木は翌年六月、堀合節子と結婚、妹の光子も盛岡女学校の生徒であった。盛岡での新婚生活は自らを含めて一家五人、定まった収入、職業をもたない啄木はたちまちのうちに、生活の危機に直面した。何としても父の宝徳寺住職罷免を取り消して再び住職として立つてもらわないことには生活が成り立たなかった。そのために一家は、盛岡から洪民に移住、啄木も母校、洪民小

学校の代用教員となった。努力のかいもあって、本山は一禎の罷免を取り消したものの、すでに新しい住職が来ており、檀家はどちらを支持するかで分裂することになってしまった。そうした雰囲気の中で、一禎の追放を策する圧力も高まっていく。一禎はそれに耐えかねて明治四十年三月五日、ついに宝徳寺再住を断念し、家族にも無断のまま家出をした。父再住の望みを絶たれた啄木は、もはや洪民村に住む根拠を失い「はげしい屈辱と絶望を感じ、永久に村を去るべく決意」(岩城之徳『近代文学注釈体系石川啄木』)した。『雲は天才である』にも描かれている洪民小学校における校長排斥のストライキは、その一月余り後の、四月十九日のことである。ストライキの背景には、単に一教育者としての校長への批判があっただけではなく、父の再住を拒否した村人への激しい反感、憤りがあつたものと推測される。それは校長との対立を越えた、洪民村との対立だったのである。

「石をもて」の歌には自らが「追はるる」立場であつたことしか述べられていないが、実は啄木自身、村人に石を投げたのではなかつたか。興味深いことに啄木は、明治四十一年歌稿ノートの「暇ナ時」において、次のような一首を詠んでいる。

大声に故郷人をののしりて背に石うたれのがれ出でにき

（七月二十三日）

客観的な事実といえ、この方が事実に近いであろう。啄木自身、故郷人をののしつたから、その報いのように「背に石うたれのがれ」るようにして、村を去らざるをえなくなったのである。しかし、たとえ事実がそうであつたにしても、この歌に感銘は乏しい。事実を正確に述べたからといって、理に叶っているからといって、すぐれた歌にはならない。当然のことである。

してみると「石をもて……」の歌は、啄木一流の演技、脚色、あるいは「創作」であつたのではなからうか。同じ体験であっても、それをどう表現するかには、大きな違いがある。宮澤賢治の十八歳の時の岩手病

院入院の時の短歌と、それから二十年後に作られた文語詩「岩手病院」のように。体験はそのまま表現ではない。表現は体験を意味づける行為でもある。体験をどう捉えるかは、いつどのような状況の中で、その体験を想起するかによっても違ってくるし、まして文学者の場合「創作」意識が強く働く。

北海道での生活を経て上京した啄木に、かつてのような天才意識はなくなり、自分を客観的、冷静にみる事ができるようになっていったと前に述べた。「大声に」の歌は、その例証といつてもよいであろう。しかし、詩人とは常に情調の色をもって現実を眺める存在でもある。まして啄木の場合、挫折感、敗北感も強かった。自らを「悲惨な飄泊者」（随想『一握の砂』明治十二年五月七日起稿）とみる悲しい認識があった。

その悲しい思いをもって「悲惨な飄泊者」の自伝を語る―歌集『一握の砂』には、そうした編集意識がある。「石をもて……」の歌も、素朴に無意識のうちに表出されたように見えて、こうした自己意識のもとに過去を「再構築」して、演出してみせた歌ではなからうか。「悲惨な飄泊者」の悲しみ、別な言葉でいえば「故郷喪失者の深い悲しみ」の創造をめざして歌集は編まれていった。

別れた女が、棄てた女が、恋しくて恋しくてならぬように、啄木は市民を恋しく、なつかしく思い出していた。思えばそれは幸せな時代であった。その時は気がつかなかったが、故郷はありがたいところであった。だがその故郷に「断じて」帰ることはできない。腸を裂かれるような故郷喪失の悲しい思いを抱きながら、砂漠のような、啄木の言葉でいえば「都会といふ骸骨の林」（『雲は天才である』）の中で、病いと貧苦に喘ぎつつ生活するしかなかった。次々に湧き出してくる歌の中に、悲しみと慰めを見出していくしかなかったのである。

## 4

その東京で、友人の金田一や妻節子、母カツと啄木はどのような言葉

で話していたであろうか。啄木一家の話し言葉は盛岡弁であろう。金田一の『啄木余興』の中には「かかあに逃げられあんした」と啄木の言葉が、比較的、生に近い形で出ているところもあるが、大方は標準語に直して記述されている。金田一は方言に劣等感をもっており、方言は研究のための資料であっても、これからは標準語を普及させなければならぬ、と考えていた。同じ『啄木余興』の中で母カツが言った言葉は次のように記されている。「だって、私はお国訛りで何処へ向いてもお話しが出来ないんですもの。誰に向かって胸のはらしようもないんですもの。悔しいやら苦しいやら情けないやら。この年になって旅の空へ出て、あなたなればこそお話ができます。たえてたえて今まで胸に畳んでいたことを始めて今云うのですから、どうぞ聞いて下さいまし。一に云えば一言に叱られます。この人の為です。この人の為に本当に本当にひどい目にあいました。一はこの人さえあれば、母などは死んでもいいのです。うとおいおい泣かれる」

直接話法ではあるが、もちろんこれはカツの盛岡弁を標準語に直したものである。東京に出た東北人の中には、深い方言コンプレックスに悩まされ、何一つ主張もできず、中には自殺する者さえいた。現代ではにわかには信じがたいことだが、それほど地方と東京の格差が大きかった。カツも自分の言葉で話す相手がなく、東京の「きれいな」言葉を前にして、無口にならざるをえなかった。だから金田一が来た時、思いのたけをあふれるように自らの言葉で語ったのである。若い節子とて同じような疎外感を味わっていたに違いない。故郷恋しさは家族全員の思いであり、「夕方、金田一君に現在の予の心を語った。予は都会生活に適しないということだ。予ははじめに田舎行きのことを語った……田舎！田舎！予の骨を埋むべき場所はそこだ」（『ローマ字日記』）という思いは、家族皆に共通する熱い思いではなかったろうか。

「オーイ、光子う！ 雪投げするはんてこい」（『兄啄木の思い出』）と妹と戯れた幸福な幼少年期。現実の東京での生活が悲惨で、不幸であれ

ばあるほど、過去が、故郷での暮らしが幸福に思われてくる。節子もそうであったろう。節子は義母との関係にたまりかねて（肋膜炎を治すため、妹のふきの結婚を手伝う意味もあった）盛岡に帰ったものの、啄木のために再び上京する。その後、節子の経験したものは長男真一の誕生と死、夫の肺結核、自らの肺炎カタル、義母の咯血と急逝。そしてついに夫の死。啄木が上京した四十一年四月からその死の四十五年に至るまで四年間。夫の死後、節子は房江を出産。九月四日、京子・房江の二人の遺児を連れて、「函館に移住していた実家に帰り、翌年五月五日、かの地で死ぬ。

結局は啄木一族の誰一人として、その故郷に奥津城さえ持ちえなかった。「啄木一族の墓」は今、身を寄せあうようにして、「函館の立待崎」に建っている。津軽海峡を隔ててはるかに本州―「ふるさと」洪民村を望んで立ち並んでいる。止むことのない波音は、故郷喪失者の永遠の悲しみにむせぶ声とも私には聞こえてくるのである。

(注一) 南部藩の言葉。盛岡を中心とし、その周辺洪民、沼宮内、八戸から花巻にまで及ぶ広い範囲の言葉だが、地域差もある。特に南部藩の中心である盛岡とその周辺の差は大きい。

(注二) 明治五年「仰せ出され書」を公布し「学制」を制定。個人主義的な立場に立つ国民教育が宣言された。しかし、明治二十三年（一八九〇年）教育勅語の発布によって天皇を皇祖皇宗とする国家主義教育体制が強力に推し進められていく。明治三十三年（一九〇〇年）の尋常小学校（四年制）の就学率は男子九〇%、女子七二%、高等小学校（二―四年制）の就学率は男子三二%、女子一三%。中学校への進学率は三%（男子の三%）である。教育勅語発布以前、明治天皇は戊辰戦争後の東北の産業や民情視察のため、明治九年（一八七六年）と明治十四年（一八一

年）の二度にわたって東北を巡幸、いずれも盛岡市の旧、菊池金吾邸（現、杜陵老人センター）に宿泊している。この明治天皇の巡幸は、東北の民心を、天皇制のもとに統一していく上で大きな役割を果たした。

(注三) 啄木の額については与謝野晶子も「啄木の思ひ出」と題する文章の冒頭で、次のように書いている。

「石川さんの額つきは芥川さんの額つきが清らかであったやうに清らかであった。芸術家の人以外に見難い額だと私は何時も見て居た」

(注四) 与謝野鉄幹の「啄木を憶ふ歌」五首中の一首。啄木の写真を見ると、右肩、あるいは左肩を上げているものが多い。

(注五) 与謝野晶子の「啄木氏を悼む」と題された九首中の一首に次の歌がある。

啄木が嘘を云ふ時春かぜに吹かるる如くおもひしもわれ  
晶子は「啄木の思ひ出」の中で、夫鉄幹が「仙台以東の人々には大言壮語をして喜ぶ風がある」と言い、啄木が「今日も東京市庁で尾崎市長と食卓を共にして来たなどと云ふのを聞くと汗が流れる」と語ったことを記している。「啄木君の思ひ出」によると、同郷の先輩、原敬に会って「激論を交換して来ました」と語ったことも記されている。

(くろさわ・つとむ)  
(受付 二〇〇三年一〇月一七日)